

# 『万葉集』 寂印成俊本系統の書式について

野呂 香

一

『万葉集』伝本のうち、仙覚文永十年本系統のひとつに寂印成俊本系統と呼ばれるものがある。『校本萬葉集』<sup>(1)</sup>では、次のように説明されている。

文永十年書寫に係る仙覚文永三年本の今一つの傳統は、寂印成俊等の手によつて傳へられた本である。すなはち應長元年に桑門寂印、傳授の奥書を加へ、文和二年に權少僧都成俊、新寫本に奥書を爲した本の系統である。

『校本萬葉集』を参考に寂印成俊本の特徴を示せば、次のようになる。

- ・全巻に目録がある。
- ・卷一卷末に、「天平勝宝五年左大臣橘諸兄撰万葉集云々」<sup>(2)</sup>、「文永十年八月八日於鎌倉書寫畢」、「文永三年八月十八日 権律師仙覚」の奥書がある。
- ・卷二の二一七番歌第二十九、三十句「悔弥可念恋良武」を欠く。
- ・卷二の一〇四、卷三の三〇八、卷四の五七〇、卷五の八〇六、八〇七番歌の訓を欠く。
- ・卷十五の尾題を欠く。
- ・卷二〇卷末に、「文永三年歲次丙寅八月廿三日」の仙覚の奥書、「応長元年十月廿五日」の寂印の奥書、「文和二年癸巳中秋秋八

月二十五日」の成俊の奥書がある。

右の特徴を持つ諸本の中で、卷七の一九九四から一二二二番の歌順が、流布本である寛永版本と同一、すなわち旧国歌大観の歌番号<sup>(3)</sup>どおりと並んでいるものを、大矢本系統と呼ぶ。この歌順は、本来は一二〇八から一二二二番歌が先、一一九四から一二〇七番歌が後となるのが正しく<sup>(4)</sup>、卷七錯簡本とも呼ぶ。その一方で、卷七に錯簡のない寂印成俊本系統の諸本のうち、今川範政が仙覚文永本に由阿相伝の本で校合を加えた禁裏御本との校合を代赅または紫で書き入れたものを中院本系統と呼んでいる。中院本系統の場合には、寂印成俊本系統の特徴に加え、以下の奥書等を持つものがある。

- ・卷一卷末に禁裏御本に由来する「権律師仙覚生年 四十五」の奥書。
  - ・卷一卷末に「古万葉集序」。
  - ・卷二卷末に「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿三丙申初秋下旬」の今川範正の奥書。
  - ・卷二〇卷末に、「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿五戊戌卯月上旬」の今川範正の奥書。
- 以上の特徴を有し、『校本萬葉集』において、寂印成俊本系統とされている諸本は次の十四本である<sup>(5)</sup>。
- ・大矢本（卷七錯簡本）系統

近衛本・大矢本・図書寮一本・竹柏園一本・広幡（野口）本  
・中院本系統

京大本・谷森本<sup>⑥</sup>・谷森氏一本・多和文庫本・伝空性法親王  
筆本・岩崎文庫一本・野宮定基筆本・大島雅太郎氏所蔵本

右に加え、前田家仙覚本、宮城県立図書館伊達文庫本（以下、伊達文庫本と称す）が、中院本系統として紹介されており、十六本が寂印成俊本系統として認められるところである。このうち、中院本系統については、大石真由香氏<sup>⑦</sup>によつて、禁裏御本からの書入過程が明らかになりつつあり、また、田中大士氏<sup>⑧</sup>によつて禁裏御本に由来する書入と仙覚寛元本系統の関係についての研究が進みつつある。

しかし、巻七錯簡本を含めた寂印成俊本系統全体については、あまり注目されてこなかった。仙覚文永本末流の寂印成俊本系統であるから、本文研究の視点からは、重視されないのも当然といえよう。その一方で、寂印成俊本系統の訓が活字附訓本、寛永版本へと受け継がれ、流布したことを考え合わせれば、『万葉集』享受の点からは、寂印成俊本系統全体の検討が必要ではないだろうか。以下、本稿では、寂印成俊本系統の諸伝本について書式を中心とした調査を行い、寂印成俊本の様相の一端を明らかにする。

## 二

本稿では、寂印成俊本系統諸本の書式について検討を加えようとしているのだが、この点について、すでに、小川靖彦氏<sup>⑨</sup>に以下の指摘がある。

堂上歌壇では、仙覚文永十年本萬葉集（特に、仙覚の萬葉学を、

由阿とは別の系統で継承した寂印・成俊の本）が多数書写されている。これらの本は、縦三〇cm、横二〇cmを越える大型のものが多く、しかも料紙に一頁八行の罫紙を用いているものも多い。

たしかに、寂印成俊本系統とされる諸本には、墨で罫線の施された罫紙<sup>⑩</sup>を用いた本が多い。近衛本、大矢本、京大本といった代表的な諸本は、すべて半葉八行の罫紙を用いている。そこで、現在知られている寂印成俊本系統の諸本、十六本について調査を行った<sup>⑪</sup>。その結果を、使用した料紙における罫線の有無、題詞と歌の高低によつて分類すると、次のようになる。

①罫紙を用い、題詞が高く、歌が低い

大矢本系統 近衛本・大矢本・図書寮一本

中院本系統 京大本・伝空性法親王筆本・谷森氏一本（巻二

～十）・岩崎文庫一本

②罫紙を用い、題詞が低く、歌が高い

大矢本系統 広幡（野口）本

中院本系統 谷森本・谷森氏一本（巻十一～十九）・前田家

仙覚本

③罫紙を用いず、題詞が高く、歌が低い

大矢本系統 竹柏園一本

中院本系統 伊達文庫本

④罫紙を用いず、題詞が低く、歌が高い

中院本系統 多和文庫本・野宮定基筆本・大島雅太郎氏所蔵

本

以上より、寂印成俊本系統諸本には、罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式上の特徴があるといえる。ただ、題詞を高く、

歌を低く書くという特徴は、寂印成俊本系統の特徴ではなく、寂印成俊本系統が属する仙覚文永本系統の特徴とされる。したがって寂印成俊本系統でありながら、題詞が低く、歌を高く書く諸本の方に、何某かの理由があるとして見て良い。

一方、『万葉集』伝本のうち、墨で野線の引かれた料紙、すなわち野紙を用いたものは、天治本に認められるのみで稀な書式である<sup>113</sup>。本来、料紙に野線を引くのは、『日本古典籍書誌学辞典』（一九九三年八月 岩波書店）にも「古く経典、記録などの類、特に卷子本にみられ、通常の写本や版本ではないものが多い」<sup>114</sup>と説明されるように、経典や記録ではない『万葉集』に用いることは不自然であると思われる。実際、今回の調査に伴い、国文学研究資料館が所蔵する『万葉集』の紙焼き写真及びマイクロフィルム五十本ほどを確認したが、寂印成俊本系統以外では野紙の使用は認められなかった<sup>115</sup>。しかし、寂印成俊本系統諸本では十六本のうち、十一本が野紙を用いており、現存する寂印成俊本系統を特徴付けていることは否定できない。調査結果からは、寂印成俊本系統であるから野紙を用いているとは言えないが、野紙を用いている伝本は寂印成俊本系統であるとは言うことは可能である。ならば、寂印成俊本系統でありながら、野紙を用いていない諸本に何某かの理由があるのではないか。

さらに付け加えれば、寂印成俊本系統諸本のうち、半葉八行書きでないのは、岩崎文庫一本と竹柏園一本の二本のみである。となれば、半葉八行書きという書式もまた、寂印成俊本系統を特徴付ける書式としてよいだろう。以下、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式を寂印成俊本系統共通書式と仮定して、寂印成俊本系統の諸本について述べてゆく。

### 三

まずは、いわゆる大矢本系統、巻七錯簡本系統の諸本について見ておこう。大矢本系統諸本は、近衛本・大矢本・図書寮一本が、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという寂印成俊本系統共通書式に従っている。近衛本は縦一尺五分、横七寸七分の袋綴冊子で江戸初期の書写、大矢本は縦九寸五分、横七寸二分の袋綴冊子で室町末期の書写、図書寮一本は縦三〇・九cm、横二三・一cmの袋綴冊子で江戸初期の書写である<sup>116</sup>。すべて半葉八行書きの大型の冊子本となっている。近衛本、大矢本は二〇冊揃っているが、図書寮一本は巻一、二、十四を欠くため、巻一の奥書については不明である。なお、近衛本、図書寮一本には禁裏御本との校合による書き入れがあるが、書き入れの経緯については明らかでない<sup>117</sup>。

大矢本系統の中で、半葉八行書きの野紙を用いているにも関わらず、題詞を低く、歌を高く書いているのが、広幡（野口）本である。広幡（野口）本は、寛文九年以降に書写、縦三〇・六cm、横二二・二cmの袋綴冊子で巻一、三、四、五、六、十、十一の零本七冊を石川武美記念図書館が所蔵している。全体は活字無訓本の書写本で、書本である活字無訓本に従い、題詞を低く歌を高く書いている。そこに、寂印成俊本系統の本で校合を行い、訓及び活字無訓本に欠けている巻四後半五二一から七九二番歌を補っており、訓は、墨、朱、紺青を用いている。したがって、巻四後半五二一から七九二番歌の部分が、寂印成俊本系統本文の写本ということになるが、書本となった活字無訓本は、題詞を低く歌を高く書いており、巻四後半を補う際に、他の部分に書式を合わせ、統一を図ったものと考えられる。ただし、活字無訓本には野線はない。

野紙を用いず、題詞を高く歌を低く書いている本に、竹柏園一本がある。竹柏園一本は、巻二のみの零本で石川武美記念図書館が所蔵している。縦二八・〇cm、横二〇・五cmの袋綴冊子で江戸時代の書写とされる。この本は、半葉七行書きであるのだが、他の大矢本系統諸本と比較すると寸法、特に横の寸法が二cm程度小さい。寂印成俊本系統で野紙を用いている場合、行間である界幅は二・四cm程になる場合が多く、竹柏園一本も野線はないものの、行間は二・四cmである。横二〇・五cmでは、八行を確保することが難しいために七行となっていると考えられる。訓は、墨、朱はあるのだが、紺青訓はなく、その部分は空白になっている。ただし、他の寂印成俊本系統では紺青訓の部分を墨書している場合があることを踏まえれば、紺青訓を持たないのは、書本の訓の有様を受け継いだのではなく、書本には紺青訓があったが、竹柏園一本の書写時に、何らかの理由で朱訓の記入までで書写を終えたためと考えられる。

ところで、『校本萬葉集』では中院本系として分類されている谷森氏一本について触れておく必要がある。谷森氏一本は、縦三一・六cm、横二二・九cmの大型袋綴冊子で、関東大震災で焼失した巻一、二十以外の十八冊を、現在は宮内庁書陵部が所蔵している。『校本萬葉集』ですでに指摘されているとおり、谷森氏一本は、巻十までの前半九巻と巻十一からの後半九巻に異なる系統の本文をもつ取り合わせ本である。じつは、巻二から巻十までの前半九巻は、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書き、巻七に錯簡を持つという大矢本系統、巻七錯簡本の特徴を持つ。ただ、他の寂印成俊本系統諸本には見えない題詞部分の墨訓を多数持つており<sup>17)</sup>、紺青であるべき訓を墨書するなど、巻七錯簡本系統ではあるが、かなり末流の本文ではないかと推

定される<sup>18)</sup>。巻二から十までの書き入れの内容からは、巻十一以降を谷森本とされる中院本系の本で校合した際に、大幅に手が加えられた様子がうかがえ、現在は失われている巻一卷末に、中院本系特有の奥書が書かれたのも、巻十以下が補われた時点だと見て良い<sup>19)</sup>。したがって、谷森氏一本の前半九巻については、図書寮一本と同様に、大矢本系統本文に中院本系の本によって校合が加えられたものとするのが適当であり、前半九巻は中院本系統ではなく、大矢本系統としておく。

以上、大矢本系統の諸本では、寂印成俊本系統共通書式に当てはまらない広幡（野口）本、竹柏園一本には、共通書式を採用しない理由がそれぞれに存在した。したがって、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式が、少なくとも大矢本系統においては、共通書式として存在したと認めることができそうである。

#### 四

次に、中院本系統の諸本について見ていきたい。大矢本系統とは異なり、中院本系統の諸本では、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという寂印成俊本系統共通書式を持つものは、京大本と伝空性法親王筆本の二本のみである。中院本系統諸本を比較してみると、その書式の違いが、本文、書き入れ内容の違いと関係していることがわかる。書式、奥書、巻一卷頭歌部分の訓について、一覧を表1に示した<sup>20)</sup>。巻一卷末の奥書は、ほぼ一致しているのだが、巻二巻末に「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿三丙申初秋下旬」の今川範正の奥書を持つものは、京大本と伝空性法親王筆本、岩崎文庫一本に限られる。この三本に共通するのは、野紙を用い、題詞を高く、

表1 中院本系統諸本一覽（○は有、×は無、△は存在するが一致しないことを示す。）

[illegible]

歌を低く書くという寂印成俊本系統共通書式である。

京大本は、縦三〇・七cm、横二三・二cmの袋綴冊子で江戸初期の書写とされる。料紙の罫線は、書いたものではなく摺られたもので界幅は二・四cmである。禁裏御本との校合が全巻に代赭で書き入れられており、書き入れ内容としては、中院本系統諸本では最も詳細であり、中院本系統の代表として、『校本萬葉集』にも採用されている。伝空性法親王筆本は、縦一尺七分、横八分の袋綴冊子で江戸初期の書写とされる<sup>24)</sup>。京大本と伝空性法親王筆本は半葉八行書きという書式も共通しており、互いに近い関係があるのかも推測されるが、巻一卷頭歌の標目で、京大本には「ミヤ」「アメノシタシロシメスメラミコトノミヨ」という代赭訓があるが、伝空性法親王筆本はこの訓を持たない。また、京大本では、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」の訓が無く、空白になっているが、伝空性法親王筆本では「ミ」があるなど、本文、書き入れ内容に異動があることから、全くの同系統であるとは言えない。しかし、寂印成俊本系統の本文に禁裏御本で校合を加えたとされる中院本の面影を比較のとどめた本であると考えられる。

岩崎文庫一本は、縦二五・四cm、横一八・〇cmの粘葉装の冊子で、東洋文庫所蔵である。本文は、鳥の子紙、半葉七行書きで、罫線を施し、題詞を高く、歌を低く書く。『校本萬葉集』および『岩崎文庫貴重書書誌解題』では、訓について、墨・朱・紺青のあることを述べるが、寂印成俊本系統で訓を持たない六首について、他の朱訓とは異なる代赭に近い色で訓が書き入れられている<sup>25)</sup>。この本が七行書きであるのは、大矢本系統の竹柏園一本の場合と同様に、寸法が他の諸本と比較してかなり小さいことに原因があるだろう。横一八・〇cmで八行を確

保しようとするれば、京大本などの界幅二・四cmには到底及ばない。そのために、七行を選択したものと思われる。京大本、伝空性法親王筆本と同様に巻二巻末に「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿三丙申初秋下旬」の今川範正の奥書を持つが、巻一卷末の「古万葉集序」はない。そのため、紀州本系統との校合に由来する巻一卷末の藍青による「此以下異本无 在古万葉集序奥書歟」もない。京大本、伝空性法親王筆本と比較すると、禁裏御本由来の代赭書き入れをほとんど持たず、ごく僅かに朱、墨、代赭で書き入れている。その書き入れの傾向は、京大本において、本文の右傍訓が代赭であるところを朱等で書き入れている傾向にあり、左傍訓はほぼ書き入れられていない。中院本系統の本として書写されたのではなく、寂印成俊本系統の本文の不足を中院本系統本文で補ったかのような書き入れである。また、京大本にはない、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」に朱訓「ミ」があり、さらに、他の寂印成俊本系統には見られない巻十五の尾題を持つている。装丁が他の諸本と異なることも考え合わせれば、少なくとも京大本との書承関係は認められそうにない<sup>26)</sup>。

以上、巻二巻末の「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿三丙申初秋下旬」の今川範正の奥書を持つ諸本からは、やはり、寂印成俊本系統が半葉八行書きの罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという共通書式を有していたと見られるのである。

## 五

では、一方の寂印成俊本系統共通書式を採用していない諸本はどうであろうか。

中院本系統諸本で最も目立つのが、題詞を低く、歌を高く書くという諸本である。大矢本系統では活字無訓本に書式を揃えたと考えられる広幡（野口）本のみであったが、中院本系統では、谷森本、谷森氏一本（巻十一・十九）、前田家仙覚本、多和文庫本、野宮定基筆本と五本を数える<sup>④</sup>。これらに共通するのは、巻一卷末の奥書、巻二〇巻末の奥書のうち、京大本の書写奥書とされる部分以外は、すべて存在していることである<sup>⑤</sup>。ただし、巻二巻末の「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿三丙申初秋下旬」の今川範正の奥書を持たない。また、書き入れの多寡はあれ、どの本でも、禁裏御本由来の代赭書き入れを有している。特に、伝空性法親王筆本や岩崎文庫一本に見えなかった巻一卷頭歌標目の京大本代赭訓「ミヤ」「アメノシタシロシメスメラミコトノミヨ」が存在している。端的に言えば、これら諸本は、寂印成俊本系統の本としてではなく、中院本系統の本、すなわち代赭書き入れまでも含んだ状態で書写することを目的とした本である可能性が高いのではないかとということである。

さらに、谷森本、谷森氏一本（巻十一・十九）、多和文庫本は、巻九に「此一巻本書素然御自筆也蒙恩許写了」の奥書を持つこと、巻十二の短歌を続けて書いていること、巻十二の表紙見返しに「此一巻毎哥送書之處筆者之誤也依其一首之上加朱劃者也与本書違行莫怪」があるという共通点がある。『校本萬葉集』よれば、多和文庫本は谷森本の一伝本とされている。また、谷森氏一本は、大矢本系統の前半十巻に中院本系統の後半十巻を取り合わせた本であり、取り合わせた際に、前半十巻にも禁裏御本に由来する書き入れを紫で書き入れている。こちらも谷森本の伝本とみてよい。谷森本、谷森氏一本、多和文庫本は谷森本系統としてまとめて扱うのがよいということになる<sup>⑥</sup>。この

系統は、巻九に「此一巻本書素然御自筆也蒙恩許写了」の奥書を持つのだが、京大本にも巻九巻末に「慶長十二年仲春九日書写訖 素然」の奥書がある。当然、互いの書承関係が期待されるところなのだが、京大本にはない、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」に朱訓「ミ」があり、巻十二、二八六三番歌の左注が京大本では「右廿三首柿本朝臣磨之許集於」となっているのを、谷森氏一本では「右廿三首柿本朝臣人磨之許集於」と「人」が書かれているなど、本文に異動があり、直接の書承関係はないと思われる。

ところで、谷森本系統と分類可能な多和文庫本であるが、唯一、罫紙を用いていない。寂印成俊本系統として書写されたものではなく、中院本系統として書写されたために、寂印成俊本系統共通書式であったはずの罫線を省略したと考えられる。また、谷森本は縦一尺六分、横七寸六分、谷森氏一本は縦三一・六cm、横二二・九cmとほぼ同じ、特に横の寸法は同じであるのに対し、多和文庫本は縦三〇・二cm、横二二・一cmと若干小さい<sup>⑦</sup>。このことも、罫線の省略を促したのではないかと考えられる。

野宮定基筆本の場合は、中院本系統として書写したということが、比較的よくうかがわれる。野宮定基筆本は、縦二五・五cm、横一八・八cmの粘葉装の冊子で、石川武美記念図書館所蔵である。本文は、鳥の子紙、半葉八行書きで、題詞を低く、歌を高く書く。訓は、墨、朱、紺青があり、禁裏御本由来の書き入れには紫を用いている。紫の書き入れは、比較的详细であり、紀州本との校合も京大本とほぼ共通する。岩崎文庫一本などと同様に、京大本にはない、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」に朱訓「ミ」があり、紫の書き入れも京大本にはないものも存在するため京大本との書承関係は認められない。野

宮定基筆本は、他の寂印成俊本系統諸本と比較して寸法が小さく、装丁に関しては、岩崎文庫一本と共通する点が多いのだが、岩崎文庫一本が野線を施し、界幅を確保するために半葉七行にしたのに対し、野宮定基筆本では、半葉八行書きを踏襲したため、行間が概ね二・〇cmと狭くなっている。これは、書本の書式の何を重視し、受け継ぐかの違いだと思われるのだが、岩崎文庫一本が野線を重視したのに対し、野宮定基筆本では、行数を重視しており、この点、多和文庫本と共通した書写態度が見て取れる。なお、野宮定基筆本は、「右元禄九年霜天念五書寫并加黒点／一校了同臘月望日加紫朱両点再校了／同月念日重更遂校合加紺青点畢／左親衛員外臣將藤原朝臣定基」という書写奥書を持っており、書写年代の判明している本である。

前田家仙覚本は、谷森本系統と同様の書式、すなわち野紙を用い、題詞が低く、歌が高いという本である。しかし、谷森本系統の巻九に「此一巻本書素然御自筆也蒙恩許写了」の奥書を持つこと、巻十二の短歌を続けて書いていること、巻十二の表紙見返しに「此一巻毎哥送書之處筆者之誤也依其一首之上加朱劃者也与本書違行莫怪」があるという共通点をもつ持たない。『尊経閣文庫国書分類目録』（ゆまに書房、一九九九年十二月）には「模本」とあり、書写年代も定かではない。岩崎文庫一本などと同様に、京大本にはない、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」に朱訓「ミ」があるため、京大本とは別系統で書写された可能性が高い。

最後に伊達文庫本について触れておく。伊達文庫本は、半葉八行書きで、題詞を高く、歌を低く書く。野紙を用いていないが、書式としては、巻二〇巻末に書写奥書「此万葉集廿卷以竹内御門跡 良恕准本」があり、巻一卷頭歌の第一句「籠毛与美籠母乳」の「美」の訓が無い

など、京大本の影響下にある本と見られる。伊達文庫本の本文には、問題が多いのであるが<sup>⑧</sup>、それでも、書本であると考えられる京大本の題詞を高く、歌を低く書くという書式は踏襲されている。

以上、寂印成俊本系統共通書式を採用していない中院系統諸本を見てきたが、寂印成俊本系統共通書式を採用していない格段の理由は、確認できなかった。しかし、谷森本系統、野宮定基筆本、前田家仙覚本と題詞が低く、歌が高い中院本系統の伝本の存在は、これらが等しく巻一卷末に禁裏御本に由来する「権律師仙覚生年 四十五」の奥書、「古万葉集序」を持ち、巻二〇巻末に、「永和元年十一月廿五日」の由阿、「応永廿五戊戌卯月上旬」の今川範正の奥書を持ち、巻一、二に紀州本との校合による書き入れを有するという、いわゆる中院本の条件をすべて満たしていることを踏まえれば、今は存在しない中院本そのものが、半葉八行書きで、題詞が低く、歌が高い本であった可能性を示唆するのではないだろうか。もしくは、これまで一種類と考えられてきた中院本そのものが複数種類あるのではないのか。今、これを証明する手立てがないが<sup>⑨</sup>、少なくとも、今回の調査による結果からは、やはり、これらが寂印成俊本系統の本としてではなく、中院本系統の本として書写することを目的としたものであると考えられるということである。そのことが、寂印成俊本系統共通書式ではなく、中院系統共通書式でもいうような一面八行で題詞を低く、歌を高く書くという書式を採用させていると考えておきたい<sup>⑩</sup>。

## 六

ここまで、半葉八行書きの野紙を用い、題詞を高く、歌を低く書く



という書式を寂印成俊本系統共通書式と仮定して、寂印成俊本系統の諸本を検討してきた。その結果として、大矢本系統のように寂印成俊本系統として書写された場合には、共通書式が保存されたまま書写され、禁裏御本由来の書き入れまでを含んだ中院本系統として書写された場合には、異なる共通書式が採用される傾向があることがわかった。したがって、半葉八行書きの罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式を寂印成俊本系統共通書式として認めてもよいに思われる。

しかし、これを寂印成俊本系統の共通書式と認定するには問題がある。巻二〇巻末の奥書によれば、成俊がこの本を成したのは文和二（一二三三）年であり、今回調査対象とした諸本は、最も書写が早いと考えられている大矢本でも室町末期である。寂印成俊本の成立時に、半葉八行書きの罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式が用いられていたという証拠には不十分である。したがって、この寂印成俊本系統共通書式の成立を、成俊がこの本を成した文和二年とまでは限定できないが、室町末期から江戸初期に流布した寂印成俊本とされる本が、半葉八行書きの罫紙を用い、題詞を高く、歌を低く書くという書式を採用していたことは認めてよいであろう。

ならば、それまでの『万葉集』諸本になかった、罫紙を用いるという書式がなぜ採用されたのか。次の田坂憲二氏の指摘<sup>(31)</sup>が参考になるであろう。

天地の横界に、更に縦の界線を引くのは、行間を一定に保つためであって、形態の上では、一紙あたりの行数を定めにくい卷子本に、この例が多い。内容的には、經典や儀軌類などの仏書や訓点資料が圧倒的に多いが、仮名資料においても、本文の行間に注釈

を記入する形態の注釈書では、広く行間を開ける必要があるために用いられる。

注釈を書き入れるために、罫紙を用いるという指摘は、『万葉集』にも当てはまるのではないか。

寂印成俊本系統で、他本との校合による書き入れを持たないというのは、大矢本系統の大矢本、竹柏園一本、広幡（野口）本に限られる。竹柏園一本は、書き入れを途中で終えた可能性を持ち、広幡（野口）本は、活字無訓本を補う目的で書写されたものである。また、巻七に錯簡を持たず、禁裏御本、中院本の影響を受けないという、ある意味では純粋な寂印成俊本系統の伝本というものは、今回の調査では確認できていない。罫紙の使用は、寂印成俊本という系統が、単なる『万葉集』伝本としてではなく、他本との校合や注釈を書き入れることを目的として成立したことを意味しているのではないだろうか<sup>(32)</sup>。

これまで、巻七錯簡本を含めた寂印成俊本系統全体については、あまり注目されてこなかったが、『万葉集』享受のあり方をその書式にとどめていると考えれば、近世に至る万葉集研究の解明に資すると思われる、今後、系統全体の見直しが必要であると考えられるのである。

#### 「注」

- (1) 『校本萬葉集 首巻』『萬葉集諸本系統の研究』（一九三一年六月）。
- (2) 奥書の翻刻は『校本萬葉集』に従うが、一部表記等を改めた。
- (3) 以下、『万葉集』の歌番号は旧国歌大観番号を用いた。
- (4) 武田祐吉氏「萬葉集巻七の錯簡に就いて」（『心の花』二七巻三号 一九二三年三月）。
- (5) 『校本萬葉集』では、金沢文庫本も寂印成俊本系統とする。

- (6) 関東大震災により焼失。
- (7) 「陽明文庫所蔵『古活字本万葉集』について―校合関係に関する調査を基に」(『萬葉』二〇八号 二〇一一年三月)。
- (8) 「万葉集京大本代赅書き入れの性格―仙覚寛元本の原形態」(『国語文』八一巻八号 二〇一二年八月)などの論考。
- (9) 『萬葉学史の研究』終章 二 江戸時代の萬葉学へ(二〇〇七年 おうふう)
- (10) 本稿では墨で野線の施された料紙を野紙と呼ぶ。
- (11) 近衛本、伝空性法親王筆本、大島雅太郎氏所蔵本、前田家仙覚本、伊達文庫本は、国文学研究資料館所蔵の紙焼き写真、多和文庫本は、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム、大矢本、谷森本は『校本萬葉集 諸本輯影』によって調査を行った。その他諸本は各所蔵先にて原本調査を行った。
- (12) 元暦校本が四方に墨界を、金沢文庫本が四方に金界を持つ。
- (13) 「界」の項。今井明氏・山田洋嗣氏執筆。
- (14) 多和文庫蔵の『万葉集』(六冊)が半葉十行書きの野紙を用いているが、明らかに後世のものである。
- (15) 近衛本、大矢本の寸法等は『校本萬葉集』の表記に従った。
- (16) 図書寮一本は、巻一、二、十四以外の十七冊が宮内庁書陵部所蔵である。『校本萬葉集』では各巻別筆とするが、禁裏御本との校合による結果を巻三、七、九、十一、十五、十七には代赅で、巻四、六、八、十、十二、十三、十六、十八には紫で書き入れており、概ね奇数巻と偶数巻で筆者が異なるようである。禁裏御本との校合による書き入れの内容は、比較的细节である。
- (17) 寂印成俊本系統に本来は見えない訓の部分は黄で囲われている。
- (18) 寛永版本等を書写したものかとも思われるが、題詞を高く歌を低く書いていることを考慮すれば、その可能性は低い。
- (19) 墨で書かれた部分を胡粉で塗抹し紺青訓に訂正しようとした跡や、題詞を低く、歌を高くするという位置に関する書き入れなどが多い。
- (20) 京大本を基準として調査を行った。谷森本、谷森氏一本は焼失によって巻一、二〇を失っているため表からは除外し、その書写とされる多和文庫本の調査結果を示した。大島雅太郎氏所蔵本は巻二途中までの未製本の零本であり、墨以外の書き入れを持たないため表からは除外した。マイクロフィルムによる調査では書き入れの色は判別できないため、書き入れの有無についてのみ記した。
- (21) 伝空性法親王筆本の寸法は『校本萬葉集』に従った。
- (22) 特に、巻二の一〇四番歌の訓は、明らかに代赅によって書き入れられている。
- (23) 岩崎文庫一本の本文については、今後の課題である。
- (24) 大島雅太郎氏所蔵本は前掲の理由により検討対象とはしない。
- (25) 谷森本、谷森氏一本の焼失部分は『校本萬葉集』による。
- (26) 谷森本は江戸初期書写とされているが、関東大震災で焼失してしまっており、『校本萬葉集』の記述と諸本輯影に残された写真でしか確認できないため、全体としては、多和文庫本を、後半九冊は谷森氏一本を参照した。
- (27) 谷森本の寸法は『校本萬葉集』に従い、多和文庫本はマイクロより算出した。
- (28) 伊達文庫本については本共同研究の研究会にて高松寿夫氏の発表があった。

- (29) 陽明文庫蔵「古活字本万葉集」との関係を考える必要があるかもしれない。
- (30) むしろ、中院本系統の代表とされる京大本の書式に疑問を持つべきなのかもしれない。
- (31) 『日本古典籍書誌学辞典』「界幅」の項。
- (32) 浅田徹氏の「漢籍や『伊勢物語』など、講釈・伝授の対象になる作品では行間に注釈等を書き入れるためにわざと広く空けておく例も見受けられる。」(『日本古典籍書誌学辞典』「行間」の項)という指摘も当てはまると考えられる。

